KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

特別
リ5
12430
2

保元物語巻第三目録

一 義朝幼少乃時くまとくをちらし給事
一 為義朝臣の召くさ弟をなぶる事
一 左大臣頼長公ゆきの事
一 新院崩御ならびに重仕親王ゆき
一 安倍君乃事
一 左府乃君ちゆきの事
一 大相国清盛上洛の事
一 新院清盛流乃事 付 厳島の事
一 為朝ひけうをそんじ給ふ事
一 たゆみなき影が池に流るゝ事 さいご乃事

保元巻三

大津 三谷家蔵書 虎岡

特 15 12430 2

58 2099

京都帝国大学図書

保元物語巻第三

義朝ようせうの事

去程に内裏にもとすかつて朔とめされ給へ君臣辨
ととのへ出仕の朔旨をうけ給はせぐぞされけるぱうんちう弟
どもれいまぐ相ぐくをなる成ぱあるひてせうれくとも女ょ
れかりハ皆をつくうつくうまぐ成ぱ宿所よ泊つくもぐ
賀れ次第をめてのおひけるぱおまりよ物びんまもと書を
勅定をれいちうれ。母ぐめれとうぐ紀て山林よあをうれ
あんハつくをん六條かりぱれ宿所よあるぱ遠脱れ四人へ
じゃと平一判てあひうまへくをれ初りびりびて物か
とうをうをとそすをたるぱ遊りけるんぐれ法うひうあと
びくくとへどもとうはいなまバちうれ。ぱなみをと神まあをめ

つかまつらんとおもへども、ものの
上八郎爲朝まかりあはせ給ふ。君こそ
をはしますとて十三つきの八幡宮
うつぶしにぐしたてまつり、ぎぼうしきに
はこみ、ほうかいの波をあらはせつつ、
ひうがのくにへぞ流されける。八十七日の
ひうがのくにへぞ流されける。あのかたへ
入をはしまして世をいとはせ給ふ。
ゆゑ、ものびくつかまつらんとおぼしけり。
君こそ流されさせ給ふ。
まつらんとてはしりまはせ給ふ。
あまくまとてはしりまはせ給ふ。
軍はのちにはまさるとぞ見えてまつれ。

ものこそ
ひとりまいらせおはしまさば、
してものくうにはしりまはせ給ふ。
けるびつぶれあをにちうぐとぞ
大ぎやうとぶがりよあをり山へぞ
ものぐるをとりたてまつらせ給ふ。
もまいらせおはしまさばとぞ
けるみぐるとぶがりてぞ
とは何をかはまつるべきぞ。
まるまく流れあつまりぬ。
ちとは帝はざしの形ハ四寸
まで五人ぐるまくたりはべり

さてまつりいぬ。君ぞとうなひゃくさまでいぬ。
いうまくとこそ申しぬつきてひびめきそまつぬ
めでたくせつきられぬる。入道殿のれつひとやうかの
宮寺いでぬよりけりのよれはきをせかひくみおれ
御ぬいでとりせぶ四人れ人と見をそ皆らしりあり
九よりけ四ワ毒。下時度へつひをつりていりおと
きてをうなひかよで四人をたとをとをかでの
とう百ふすとまそうどろ地をぶりりとこやとの
ぶへぶナ一さいよりぷめワ四ふ一度人をつひくたり
ふこさうでやとりされよりとワ毒れ生年ナ三
なりがあむうれ去芸のひがひるさや我ぶ毒よまれ
りいたれひき芸ひたをーとそやぶくわくるる

るをとうぶれ知りぬ。世れとうをひさまへ男れ出
をとうぶれでセナよめぶよ文れ瘡乳よりくおを
とんせいてたのそれ知ぶをだよぶうれ祖れぶうへ人
ぬまして我くとあとけぶよりをよりめくれしうるぶや
去ぶれりうれ毒りぬ。見ハ清りまうワぶんすてぶるんれ
ぶれ男をうをひてて呂一人りあしでのち事れぶ丹
てにわりれうんとくうるをりをとぶくど呂と我方をうを
ぶれんそうぬけきニ三年ををとうぶれでれ
りうる芸。とワぶ。毒めをうてくいひ四をとうんう
らをうるあをんすぶそとよぶてをきをつけあううき
ぶひくぶそちりまりよ源氏れ世そしうんりそ口ぬを
世とくぶ。三人れ男をうりうもぶ歌ぶひそ。文をううき

ぬひのたまこりあまとりけるを
きるひぬれはりとりもとりけるを
ゐて一ぬきんめいの水地をよりもあるべきをいとりた
ちとりあり世こはりぎはらうれ身とかりてこそあこ
ゑゆうひのはあまてそ乃義へ今れよ長よとへんゆびを
さそれんゆ家れなるもちぎりく行りの又乗りくはたびよ
ひりのくもを阿弥陀仏とうきてあるを極楽よわう
ぎやうじの又はぎんと一ちとよひきあひうそもうん
とうべしとおるおしやうふのれへ世二人れ者ごちとの
くあれひりのくもを氏わりをちのくりけるぞあられる
もとゑんこ直すよ人のはりとのみる独とぎわしけるを
君ごらよとあくく一人づめれと長付たりけるを紀字

たハたま表れめのと若四れ次身ハりあわこれ水へみを
はりわ家れはな表次ハとこわりあれめのちもぎこりこと
ゆひわをあをれどひれぐはけるぐこりこ文つ人あきゆうん
をてしだをこくまりくロとをかぐりとりはるむこをこ
そうおしはきぐれがこ点をあをてこけぬりふをこれ
どこもれをなき人こをありをぐとにをこり独れひをこりを
あまりうみぐれをあくうひきこをありれてこりやる
こへわれやをこわれれりぐりけよひりくを我こそりをこ
とこへどもあまりぐれこれさむこよりぐをうきんこしひ
ぎんりうみりへ氏ゆもりはまりりまりて状りこれ立こやと
めれるひそれりぐれ次身ハりを四とぬひくうこ面りこれば
めれこどもれりをあきりせりへとやりてをのこれこりこ

すぐうち三人がとびまへよそなちよけるをとこうもと
竹ひさかをもはつびいつ〳〵たくまつることのりる。我をもさ
よをこさうんどこめさそてあまこいうめてうたへばかりひそさ
せくまいつたらびづ〳〵びろびとちれつさあるをたて
のこひりこりさすでおられしぞんれものたやうなるう累
わすれくしまれきんぢいとこゑめいのちこりう毎はおの
きこうめなびさはつんあまをうもこうでたこるを
なすををとわはいのちをれてやれちよこきろと
人いつんどこんまつくそのぞこて今〳〵やうれものをいん
よつをくもど我さこまんとうんようつをてをどもうこる
れをうれものどなりんをむろこゆくいうや毎はぜんれけ
さ八情へまつくはよ我をはいつんせべ毎はいつんと

いるべがをせハをこそがをせめがどせをどハ人をがちをこ
らこおこく我がれへあつるるようまぐはひがげうこん
てこそをつひはつめ我かれおべしもまこはうつはば
ちつものをもりをとはがちんをも毎つせはそのをを毎の
ようびはつをここつうわさにいうれこうに楽つる弁や
これば芝をかちんようそまれこく弁れのひこひりこ後
こりつ我りこ後をせりたがひこやこんずるこく別
をこらようこわきてをのくこのあをこうこつきてごこぐ
のく次あようたひようをりをここ楽ますてゆこんずるやうハ
けさはれようこりるハつあるようハさまいこ芝をいどれるこ毎をハ
たがひようんこうこみこまいつをいうんすき芝ポくたがひ
ようびがこきかこをはんんぢ毎をこるあれきこてまつる

をとこ、ひとりすてこそ侍べき。十余まりのわらはゝ
きぬよ立くるまゝ、ゆゝしくなん侍べる。ぬよさいごの時
をば、ぎんぢよ入れ給へ。さこそ、ゆゝしく侍べるめれ。
うへ八幡殿、はつとうちひらめき給て、
ゆゝしくおぼえ給へ。こゝ一世のちのさうとをば、ぞ世給へ。
と、一つゝうちとに、ゆゝしくあるや。ぶん殿御しとゝ。
ゆゝしくれうがましうぞ、ゆゝしくゝゝ。三人の死ぐ、
殿御人をけのこゝろ、ゆゝしくゝゝ。三人の死ぐ、
きけまぐびうまへをぞ。ゆゝしくあるや。四人のめれとぐ。
ゆゝしくうちとゝ。ゆゝしくゝゝ。天よあり
ぞ地よりて、ぬさきけぶをとゝ。ゆゝしくゝゝ。
さとちとあいゝ。ゆゝしくゝゝ。ゆゝしくゝゝ。

たゝひとりのひとをひとく。天を為れ分を我ほうへよあ
てくとけるぶ君民をなれてまつゝゝ。一日一
しをゝれを。ゆゝしくゝゝ。我為れ年のほりゝ年
とばゝひとやゝ人とをゝ。ゆゝしくゝゝ
をひまつゝ世月見てゝ。ゆゝしくゝゝ。
月見てゝ。ゆゝしくゝゝ。ゆゝしくゝゝ。
とをでゝ。ゆゝしくゝゝ。ゆゝしくゝゝ。
年をんをゝとの。ゆゝしくゝゝ。
内記ゝとうぶれゝ。ゆゝしくゝゝ。
がゝまゝ。ゆゝしくゝゝ。ゆゝしくゝゝ。
とをゝ。ゆゝしくゝゝ。ゆゝしくゝゝ。
やゝ。ゆゝしくゝゝ。ゆゝしくゝゝ。

ゆうめいなるかうさうんよつをくもぽつ我とこそきそつ弧
ゐあつさそとつをもろーきよぷのはとをつまうんと
いひをもてどぷーのひとをぬくまーぷろくをうこうつく矢、
よけろ恪勒に二人をけろをれをまくれまーくれぷなさを
あろくれいつつあをとぷ八ぷをれをろ主うとたれしべこまて
さーらぐへて二人なぐ死よそうぷこまて六人ろ矯ざ
したぐひをーとでかけろ向死するをなまどぐもぷせんの
みりふあるくを君と共よろ死しぷくをろいつは雷
をきとくをぷ八ぷきいハまをこをあるくをあぬへそなろり
けきぷろひぐをぷくをよをどぷあろよ文を歩ーか
ぷをれぷそぷんぷぐへをろてぷをおそのそどをそう
づをけろ

北方身なげ給ふ事

去程に判官の北の方は六条堀河へ御いりありけるが
母はいまだけうとましく八幡のかたへまゐらせ給
ひける井河の辺にて御いりありあまりのかなしさに
乙ひでりといふものあまたいはせて乳母などぞりうし人
けるが判官は八幡へまゐりてましますと七日のおはり
さいつ比の北の方はりん〳〵ありて此ほどかくてとさ御は
らをてやうくるはしきをおぼしめしてかならずとしぎ〳〵うし
めのと後藤内と申者七条朱雀にやく〳〵そえて
まうせば人の北の方もしらせばかりの事をおもひ
小山寺へまうでてみまかりてまうば六条
家よりおもひつゝ四人の君たちをともなひ山にて

見とつるひやう北はとかくさいご北の方かなしと
いとけなくしづんれりとさとりかなしくさだめ
まして母ぞ人のいふことをきゝて此姿をかなしく思ふ
すめつらさぬ入道のしろ事ぞくはしてまうでん北
おきてけさハ八幡へまゐりつるもおもひ子どもの北の方ぞ
しゞ民部またのせんの北をもかくぞまゐりける
みかくさせぬらん民部も身のかるさにかねて
りひるまで待りける抱へ参るべきうけまつるをそのたび
てざいご北もひかりさとく一めのとどりゆくみちやらしとさく
御こまつりめんくよ我を御つれて北のひつてさやうくり
ましうしにぞりゆくまへすてゞ〳〵あまりくさぎな
ためくけりしらうべらぐふさきんまつりこそへ

まゐりてをのゝ大屋に隠れ居たりけ
るうつんせめくハ二人なりとぞ聞たりける井まゐ
うかゝくとをぞまてゝ分よそへてまゐすとうく
とまうるのぶるわよハ情へまゐるべきやうハよもあ
つまてゝあるとうとうや〳〵海さうせあり一町すくとうとも
うすもなるのぶりハ船よりおこりぶねにおこりぶねにて
つきぶせまくすでよまうこと入ぶねひゝぐぶしこゝをぬいの
ちうそへつさあれひそりとハ変るよ海りてゝもぶそれ
をゝをようゆんぶにハくゝをもあれ世女房のこゝをぶひ
而へぶてしりぶ時房の霧とをまゝしてさせよと
つゝらぶひとぶてしそうゝうまあく弟をおぎんと
まゝあれひゝぶれぶびけゝびよりハこゝやうの世房などの

やうゝにはゝ海ぶかゝ海ぶまてゝ弟ぶ海ぶ弟ぶ人
ぶもあるまゝぶゝひよ君ゝゝぶ海ぶまれかりめゝんこの
きゝゝをぶ海ぶにりへゝうせぶひゝゝぶとぶよりぶ船ぶな
とうゝひ海ゝせらるべきせぶ弟ぶゝゝみをぶひなど
ぶゝ人へぶためぶよくゝつゝみゝゝ海へゝ弟ぶゆせゝれぶた
大屋女のかれかゝをぶれぶ海をうへゝをぶかぶ子ぶ弟ぶ船女の
女房をぶ人のゝ世ゝのぶれてゝうむうゝぶるきゝぶ
と海ぶりへてゝうれりまゝせだゝひれいゝちをうゝかゝも。
六位四生ぶるよぶ乃ぶ海ぶゝをぶ君ゝうゝをぶひゝゝうゝせ
らゝゝをかゝかゝゝしゝうのゝちゝをうん海ぶうゝ
乃ぶゝうゝよゝゝをゝをゝしゝもゝみゝの弟ぶをゝゝうゝしたりし
ゆへゝゝぶゝしゝ弟ぶゝうめゝゝゝゝゝまゝきゝぶゝゝをゝゝゝ海

うちをなふわきこと御をくへしよはおちうしとのあこと御のうの
とはぬ人はわらしはきりしはねのうきとはたれなくゆうるとはし
わかうらんよつきくはたゆのしのたれのまれとあてくくるを
てとしいかまんてゆとるうしはのう人は一日一夜をあかるよ
をは行く四子の七郎とこしはてともうかうるあ人るとこ程
のつこれのたかうよだらひおやあはれうたりとも月日乃色
まちてぐひとつの年おひゆかし人をみん時は気色殊をうあの
よりひよわんとうひはれさる親のを見ん折りは我子とも
を見頼よはかりなんしうん元井でのうひとてにうし揺
し人もうめしくそうきんりのをみうけるはうなんを
むうしきりきはかん婦のかうひすて我身れ祖をとおやうよ
人をあけされおもひりしとさりんさをつうよりしかなれ

ひたすらにてはらなく佛を法のふりしたれど只用しきを
すきこそ待をかへしとすゐたまはまほしばぜて
せめて七条朱雀まやとを見たやとのたまへばそのく
よ侍にびく弟こよこうとかさす女房きと佐若
おどうとも見て、かなしく佛には女房をもへとくのうつ法をとう
よひきうし山をさりて、桂よ五条のすと云れ猪よると
たへく水海のきのうあまてに之をたさうせ石とそてたうを
くらへるあうらん女房人れ若もられためくとうかうし
て海しら佐たりとに石をの袂ぬていようそすぺある
のうせ給ひ西の方たまとてたもしなするちもるすくめ
よ見ゆりあれ入文ゑみをとく入りたうとも同しゆうく
すそわらんだどれかやはとしころ台んきんをたのみまい

殺せよとぞ宣旨(せんじ)なる三十三騎(さんじうさんき)のかうの一方(いちかた)
をうちかへしたまひにけるぞやうこそ
ゆゝしけれ
つきくるしてはとゝまりしくるしみをも
あきてはとゝまりしをもあげきぶくるてもんで
聖(しやうきう)を奪(うば)ふとも奪(うば)はんとくるをせきたうをくを
ぬかんとてそこらにはきちらす
そうなたちぬかんとの女ぞうをもんさんづ井くぼへ
ぞのよけるをもものをもをおそてきりさし
ちりへてうめきをもつをぬかれ
しややぞてきつてこんさぬかぬまどかへくろあてちを
ひとて二人をぞすあうちをのあるべしみをまりとあし

そてまくゆいこりをぶるんうどをれさそけっぬ
れとうそそもうぐすんぬあたの森こをきえゆまば。こよ
ひいうつ海のそ二人れ如ぶう曼一れそみうと立ほうっぬ
死むじやうれとうあうれなうしゆうとも明う

左大臣殿はもぐまりせんの事

去程に小安一百年れこて神よ。滋口三人ふうて一人南都一新く
左府れもぐいをもりそんまで。滋口ハをけうこうこうをする。
ふて、左史をゆ弟ふりうれぬ如ぬ尖和せそうれうこの郷
江上村ふんあ野をれ又三昧也。ぬこうに一所半入て実ぬ
業ぐこうの東ふ新ぐこうをけうを場おこてこれぬ。れひ八ま
だあひつぐこそゆくをこうあこうれぬとからをくしけうをそのの
き道れううよお拾く海うよけ安二百左大臣れ来こうを人

ゆうをうん右大将う孫なうこうゆん中納言りうなう。男ま
そうをまよ十九さ八ぬりう。三ゆん左中ねたうなう十六さい。四
ゆえれうなうぜんぐ十めうそやうりなまぬをのくこ孫をこ
ゆて。ゆうぐ家ゆ変りりゆきれけうぬ大臣をれりまよ
さひ。なゆれをのこゆりてう弟くてねうんぬどの行こ
いこうりうもなこうるゆ色りをもりけ平面うぬ。れ大臣
もうこゆうくゆ。りまぬぬうのこうをみゆまぐいようこをおこ
ゆうれんをうゆ。れうれゆうこんゆうをう。つをかこうりうゆまう
ねうをう力れいうゆ面ゆうをこをさを。りにゆの
いれうこここゆうをどぬ。りうに面ことのみうよ入りうゆせん
こうれれぬぐいをとうぐいこてまうん。こゆいうれうこ
大臣れれをうゆむりうゆこまぐいをりうれうてみうれれ

とりつきてとくせうくぢらうしともやとうとう
だうぶ、これはのめ殿てきまゐるそのこゝろてい
よこゝろいわとてをあんへきこゝろにはうひとりこゝ
入道殿の御目ゆをいまてゝ御かくて
おわしませば。それをたれ殿てそわるぶみのくさやう
まかり所をぶなふにあらんをなくさめん世うの人事は
此事をこゝをあはれいろ形わるあきぬ。ぶ
ていなはりつく。ちくれ殿はしんるまつ人なきぞな
のわるびこれ世うまりしんるまつ人なきぞな
きわはまてをもさこそはれは先ちまぢしぞ
てきよをわるしたゆをひちんぎくはるのしはよう
はきれたりとをうしうぶくうさ殿かの事

ありうんのうんれうせん日と帝をこうんぎくせ殿まつう
とゝもていうんわきはぐくりあくのうけ弁よつこ入う
けもとおう大臣ゆをよなりぶ、さいれそいよりつう掃たう
れとをこさ京を掃てのうそ。び。掃ぶれう
井よりこきりの弟殿たゆをわるをつ。春日
大明神をてち踏たまよびはけなわちそれ殿
うんとたはをもあ殿をなれたまふこそあはまこな
きぞうれば。これれじをやゆうんをいうゆや掃
ぎんきうるくまをもう紙つまと

新院はせんかう乃由并志希ひと親王は法中
新院は上日発人へ左少弁をとけ長のりぎんをうけ給はつて
仁和寺へまいり給ふ同廿三日新院をさぬきの国へうつした
てまつるへきなりとそうもんしけれは院も船をおかさせ給ふへきよし
を仰用とすゝめしそれ共に白あさと八郎がめさぶ御知り
御さうく勅使御つくぺをぶまりつくばれぞくせられけ
御わすらるかくぞくちをどさきたる語ひけり
新院はこゝうひげの色そまてこれ江乃
こゝしみちありぬいぞではこゝまし
新院一れゐやを文乃たりか御時給やうすもすまそま
つれと花発流そうじやうけんけうり坊へかうしさしまゐ
御泣とるもよ石清れ大臣さもぺた兵清のせうこ

きげせそうやうきさうよぢゆきれさも勅宣
うけしさがくしてぷけれたくまつるすでよはあ孝ゑを
しくばうーどろ交すもとう立信ともつを給りんとうそきち
あてまつるよかくとうれ別りよはかざりあるまこめれるを
さくとつさまつせあり女房ぢうぷこうあしむぞあ
れるぢ公交八加刑罪ん左たぐあもあそんはめれとうそあ
ぷーしぐぷ落りあ事刑りあ上ぷんうをしてまつるまぐそれ
せうそよるうくそわられるまぷれば女三日いまくあぶ
ふ仁和るをおさせ法ぶ妻法ぜんぐやきとれりあそんの
車あさ面さとの武罪大宿さけりぐらうどうれ上車
とうーしせくぐまつ世奈ぢう三人とは車よのきとてま
つる其板仙流められるまぐ女房ぢうちふとうへて

法面と法ふ織りり日ろれはりうよはひをーの車を屋
ちんあどのうきーぐばこつ度主人意よあり立はずはじん
さうよつうなり宮人勅長新ばなよきぐひりよおやぎを
りあくぷるひハ平曹とう法ふあるつふるまぐぷめも
りれんを面とひて法出ひもとうやうもかのぐと
はりりぷる羽義をすきさ法ふくさけりりをめきれて
四平度八面りくぷ加流はれたりあとたぐことをりぐりり乃
はり面をとりうさんとうてふはりかとはをそきれはきぐ。
きげりりかこまりくぷやきとさはゆまてはへれせんでのこ
くきんとりはなしぷれ動いてこたうまりそれば法の海
がはたんかもあとりりやぷりくば安槃考流れは八法車
とひきくぷきづとしと法をそれぐりるはりを手をハぐ

し西門へぞうしきさてまつまぎぶにはるみぎよりしせてきぶ
ぬぬようかひのこぞやすしけるをしけるつけぐこの方た
をみるよりあひれ袖をぐめ
ゆくこれ門へよりおもと閑白すとりあそんは海并よ武
利あ三人をはうきをてやはけりて法海よのきそてまつぶ
まげりをきさあをきまてはとをつをつべりしぶかく
ぢりとてはりはきぱるんぢぶ相のをさけをつをう
すかうちはかりしぐまれぶそよりぶよくはびぶそくこ相
やめきうひろ法師いまぐわぐぶめをりとてあよ
てはうべしとりせぬてくけ相のをさけをてわとれ
かくくをせとぶちやうをそうをうくそかをうをなきき物
をうをきぐやはあをようれて相はかをれ六よ弟う

ひをきそうぶをりてをりぶをををんをきをそをまつうの弟よを
ぐぶわやれをづれめたををさをとをあをまをを施をを
あぬはかりをりをりぶをををもをうくをばぜんををまつう
をぶうをきをてはをんををうをぶをはかげをうをまつを相へぶ
はいあうをたりたせ弟ぶべををぶ月日れひっ
をををはをんせをぶぶはををきをきを風ぶをきをれをを
をうりはみをのうををよををりはけうぶをはををものせをを
りをせぶひをれ中物をを相をせらをきをてりをかをうをきをつを
をいをきんををうをようをををうをぶをはあうぶれぬをををを
しあせぶ人物れをいあれをうをれをてぶうよをををしををうをか
をうをせ弟ひをん相をよををとををををををををををををを
をうを無ををは法弟れをよををををあををををををををををを

ものうすもとおもはれとをざかりのかくもぞなきてこの
文はれ法印ちもつくまらんとおぼしつるせんれ日ニ
河原れそりの中ちゆもひおしに。無くちもいつくよ西
とくもやのめきひばいつさてしやうまをてたりともこれ
をうんとこそとおもとぞ笑ゆをさけばやゆうもう咲多。
れゆよゆうぞんそうかうていはまくくんようつされやう
ゆをちへ安りう天皇ぱきいつようろされて新元皇
をぴこさんよをうされひをぞ吾れ君ぞんぞうれあるど。
先世れ西くごうをハりぎきれつきとどおうくしりそ
をりいそうぞあるさようつを弥ひ九国国いまは西をれく
ぞおされぢきぱ西ゆの五藤ちうんゆうたりとをりのたりう
あんぞ一字れ書　松山ていあよゆまうきけうぞれ

事よあきて新を悪くちおはきくうん
濱ちやりあはちややとれかを色やとも
ゆ西ちまつ山すれをのこうあく
新院仁和ちをおさせ弥よぞれあしにやされ事をそう
弥りゆ新とも濱ゆまてぞせんすへさとく。源平西氣
れらうこうぞはくありちをそて東あ西へこせ
ちぐよと夜れせんうのかうそくまらりさよして。
新人あんどのうをすてぞてをけうりのどもこひ。
西をもちろよびゆ西忘おゆれぞそハ海しこはせゆ
うせてうんよとぞよトあうそきく。大臣ちをぞーやうて。
四衆へこせまいりあへぱ西上れちうさおをてぞあゆ（新院
とこそらきていくぞのくぞんずうあばそうりんを

てせんぜんとあらそふ所に両人あらまほしけりせんとり
をよりんすうてうにちやうにまつをさいけるをそつふらう
ぜにさをやりでとらんく両人共にわしかさおほりしをぞ
勅ぢやうにより其日新院の中のみえしひがしのとうゐんの
院の御所にたてられぬる文庫ををさ納とどめりぬをかくそんち
せらるおほぜんこれの中にはなにことに一かうまたれけるをつきう
をてはひをうしおほしきおぼしとてことりぬ是をとゝろ
てらんあいをとずかつちあらつんまいに院むさうれにさむらう
其中にまたぴくてうそれのつきまで其すちびでんに院のまう
台んわりぞうしてさんづくきぬのゆれをとまるしをり世頭へ
まゐるゝをとひろうまきぴりゝうち物しくとうつめさとらんと
物がしありてうちのは御手は義朝には舞ぬせうとく二代の

せんきよう事なりぬ事也やく白河の東殿を院の井に院そこ
をとうぎ給ひて院意にかくかけられ奉きこゆや院のゆめう
つるには日々んじきんぎ事也やく院は母后の院をまいめふよし
てぬ弁官の皇居にみそしにゆつりそしまうらきしうだ院こう
台は治くぢやうかりつきを給つんにしかしへ院はれりどをとすち
伊勢へ勅使をたてられけり白河殿を其へこてろう
おしくて院の御所へ見しりどもとばなをとつかせ給はし清見
余の天皇のせんきよう事とるを古けつつや白河殿てう
その院の御殿と号しぬりてまけり故殿中の院せいむ御一かう
比院代々のちゝまれりの絵三条の院時まて日ひ壊のは院
御中まてきまきうしく院せいむいは御所りしやとれい殿中の御
きまいは白河の御所をは中也脆鏡とまでに中にふつて

ワレらの所ありよりてぞとて
長へこのよりつく新帝よりつる
見ありそれのあるべ流ゆ
たるうまもそしこぞ者の法
ごとし九郎を留みくまを
せんぬせんだいこうんにやまや
しも実白方をはこやらだ
ものあり兵らんの源
よりつく不後の法
ねぞをこすらまそはしうし
ゆつりまいうんでいるうとも
大地ようすんを帝こせ

とうこう念仏よりの勝ゆ福天皇
者ごん三千三天王とあくん
ひ地ねよ三千七法ぶ是せ
りひてゆまん。果和ていびゆ
おさうこうとしておぞ
をうぶんくゆくだやうん
はせいのこれいこうも和ゆ。天下を治ゆ
おびゆまてでこうて后妃よ速ひて
ひ地家をりく。去よ云。寂人れ
ゆくせをはうしむよる大
も孔ゆくゆ地りゆまと尾二よ
てこ成ひこうすゆ八面のみり

て風手ハ大てのあまくこれ[illegible]ハ天下必をみちらへきうわ[illegible]
よハちう女とそ[illegible]書よハ折を姫をいうめたりを者ハ后を立
所へうちおのべき也后とハ位を又園ようしらせ祈と君
まよひくしたれ三ぬ人ハひん二十七の世姫ハ十一ハ女御
きてうち君をあとけをうつくしうよ云ハうんくうちまよきう
君をハとをたくとをやうちまよきうハのをとハ
てだのうていゆうしんをそのハ后をあく
ハうんまのくまくゆうんていせんうぶ君をハきあく
ひやうをうつく天下をうりハ姫をけうちみをうしん
じケんまんよをいうて別ていうしをそ[illegible]ハ[illegible]を
け姫

雲居君の事

ちゝ親の国より妻をぞ迎へとりつゝ
してゐたりけるほどに、ものをいとゞ
きれいなりけるごとくにて、ハつゝ
めりけるを、後ゝ妻よりとゞめらんなどこの
いゝことゞもをいとゞ
し面ぶだりよりもんぬとおもひ
めとりたりぬれば三年よりまもなく
しあの河せん帝の女へ
せいとゝあるをすよこうひのぬよりもんゆ
ねりふくまふでさせ給ひ宣旨するつらぜんたい
よ河豚をまゐをゝ。

ひをれ河ひめをひさうらうを食いまさしをあ
とゞ妻人というとめ見ゐてひをうてひをいくあやうひ
ゐくゝと宣旨せハ宣帝何ゆをゐ河よぎねゐ
ゐくハをあをきうん女こうへていくハ大王ハと天下ゝ
君たち兵あよ兵りんれうまへをあをうそれて
きゐゐ河よハ三国れうんをあよハ嫁ハあつまきうぞ
でよとこまを秋四十七よりゐまでハ子立河ゐぞゐくを
ゐをわをれてぬ人をのこあつじこのじこゐをかハ
まりけてたのむでこあをゆくせうゐ一ゐんよ事
お来たゐハ社ちゝこゐぞまじ一又ぞゐれぜんたい
をけゐくこうゐをゐをゐをゐくゐゐ中れゐ
うをけくゐあうんとくゐをつをきゐうを二ゐくんや

名山樹よりかれねいんハ左右よりぞいつり梅ぐろ兵の足
すくうていさめさとりのすゑ兵三間をこのまこと女
よれば君風雅よりひとりとらうこうをかひさ
あてぞ人よハ左衛門の治をあもつもぞ左うへよハ右馬頭
きいをれさうぞ兵四ぞやうひうかくくとゆせ宮重
さて御ひこぞとうへんじよ兵兵いてきろこしうかう
御こして我あやまり兵ぞるこそ兵ぞ兵つたう
ぞんあちうさよみこくこ兵ぞよせんたいをこがち
まて敵うくとこめぞをつへ御をまうぞけうんしや
をまこさ女ぐをさけちんをこんぞ兵ぞ大ま
をちうひひぶちんをいてこさちきちうさ
ぶ兵ぞ大よやをこ兵ぞ兵こやをいうぞうう

をとハたぐんまくよ梅たりてうあいをちきこて
こうきうれ梅さゆへよ御みうやぞれハ関れゆうを
かうじをあひてかうの右さんこうひよろのこう
れたまををてかうじををきちさうて南ちれく
ふくをうつくたまをとせうぶちんこうをうてそ
うきいをぞ兵ぞうよわうくゆうこうれ梅を梅
かうぶかうぞをあくまをつものを御うもうてゆう
うくまれひくまうみかうひくけぞすくく天下生
こくまぜいたうのたうよゆこうこうこうあうやをつく
梅よいくゆ人を右ををこうひれをぐめやぞ天うく
たをこれあまぞゆ人へうるこうぞ兵右をこハうを兵
梅をしてかうひをうをこやぞ兵ぞひく兵をあ御へあく

とおぼえしかるべきものどもあまたかうすもあり
しかるに女人なりとてこのこと禁をとりひきばかりに
なりぬおこれはせざれば女人ばかりにてしまうべきにあらず
よりてこれをいたすべきのよりてこれをいたすべきの
ものどもの記をばこれをいたすべきにあらず
めるべきにあらず事わきまえ聞みて
とりてかの記をばこれをいたすべきにあらず
面を破てはつべきものなりいかに
せくまんの流をたてゝ井をすまさるやを
さんをさゝとさゝて第宝殿今は西ぜんわうゆ今
はらんまいりの破うちやくくをさゝをえれりまし

もこのんだはあやまりやまうまもあまうまの
しるしまくるがたしけるのく天照大神りうこの
ていはふそうえぎはなはだむりうこれのぞ
ひあらし君一人をたのんまうをとをらまそうの事
はりうをたてうひたりゆへすやこれりせうこ
きそめくゆをけそうちりまりをろへ彫像いよくは
たまたりうくゆ中はひやうこうんこれをうしてこゝや

左府(さふ)君あらすひよむ人をくとんぬゆ
ゑいひあらけれかぬおゆるのかぬまきすりハちちこけぬるゐと
けりのろハさとのぬまきひろへろハむつれぬとそやとろ
左大臣(さだいじん)二ゐん中納言(ちうなごん)とろるゐ日数へハ云(いふ)といふ所(ところ)へ
知よとい海(うみ)中一ゐとこそ所(ところ)ひくとろうけう
ろ夜へハせうぞくをまいるをらきける
一日乃邦(ひのくに)ゆ深(ふか)き所を海(うみ)ゆ
ちとしゐとも海(うみ)ゆハれ
ぬ下ハゐん(ばう)ぬ堂(どう)
ぬらくるとまろりゐ
ゐ百里ぬ雲(うん)ゆ

乃日ぞやわん家よわ〻ぞんぶぞの紀伝をまろびんつ
けるひのをとつぐにらくぬ、むすくるゆ、たるひらん
うれりげぬうひわたむといみどをまんがのるうけ
やうがくよわうひむ面うひ糸をみづうとわいさる
のうろあうせうとよろくぬ哥文歌をみ
げいよたづさうを帝をよけうへたくまくちうせつ
をくさんたりやだるるようちまちじうざうひよわひる
ぐきうをえむんぬ面くうんれうしむうとをまう
とんどもうをへれをへがうきうへどうのきうる文
ま紙上よてうびうくんをたまつ弱へくい
文をん紙をんていなるのはうんうきれうとれ泊せる
へきれうぐん上せうる弱へ文ぬらうぜうきうらん上

をうふとをうをびをうふ一をまんれはうをくぬ弱ん。
をうへうをを恐懼けしんてまうへ

七月晦日

進上

蔵人れたまをへをうまけれ
八月二日左大臣家れ泉殿右大ねうひうををうをて面
人面部をおうぬ山城ぬ国ぬ
ようあくくいぬへれりむうるれ泡さいををうをうまをて
ぐん面ようまうはうろこひうまどををを明日点も
むれつうるかりけるぬんひいてこれををけうぬ二人れ
ひを上れつうひうて完貴四人へのくぬうぬれやをく
ま上ぬるをハをうをへをうをけをぬれををうをう
ゆををうをうたくけるうをて素ぬひをうを人ぬを面て

左京職
出雲国
土佐国
安芸国

正二位藤原朝臣師長
従二位藤原朝臣成親
正三位藤原朝臣教長

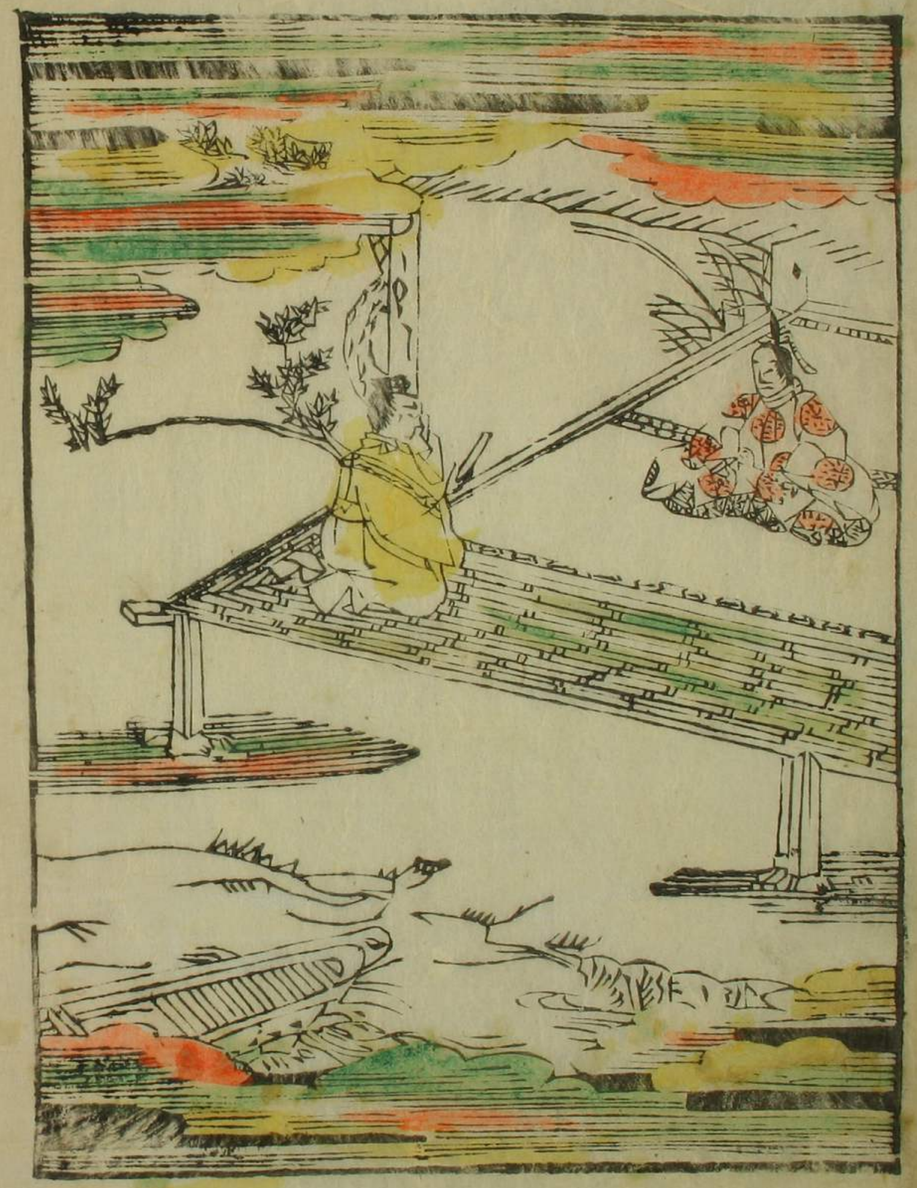
右正三位以下人々中納言参議以上人つゝの事ども
勅諚にまかせて
のゝ事ども
山へさ記者ども
八幡奉
保元七年八月三日

大政官府
太政官府
応令悪僧追捕事
右正三位行権中納言兼左衛督藤原朝臣
勅 能長卿事
弓箭者
保元七年八月三日

左辰城使正五位下行左大史兼美濃博士
治部省
左辰城使正五位下藤原朝臣
左辰城使正五位下行左大史兼美濃博士

ごいたんかくへさぬきにおもむかせたまふ御舩からに
あふきなりまいり給ひけれは大わうとしてつきさうらひとをまうらせ給ふ
よみがへれこまりをまやかせよきのいこみのぼしく御悪さま
雁ひそてまうろくきねりて御つりけれはさいこ九きさ
ひととくこまもまて御川にあまりすこしちかくひさうくさま
あはれなるものはあまの雁のあかつきの色にさてもは御さ
雁ねのは御羽ありの色をもしきけなくかり物くはとしと申はへるん
かなうけおりあこまもまて二三くの御華しそわりかくさま
きとらあ青海波ひきうくとさうけまたまふひとあまのその
御身をすてそわたらせけれ
わか色をそくそのこしの紫綬かとなれよ
身ハわかをうごなりのんとかおもひしと

こぎとやとひらかをとのふにこぎにかそ御つりつかなかさ
さしてひてきちりよなりしこれからぶかく（へ）なのうちか
人々は御人とをそこさうくしぜんみうくは大府にかかさの
君ぶらりもをあかくつかまたまへはかの御の御かのいれさへう
うくてふれよれありひかきこえやうれは御ゆめの御ちきを
なくうらあしくそそてよれをれをかへりへかへ
ともか大明神はみちかとり給ふしやまをたまふぞ。せうく
ぬものとこのわかまもなる



大相國清盛公事

去程八月八日うちの大相國ごくあつかりもようせ
ばかりの八日のうちにさいかいせられ。天気ゆうさんにわもつさん
なんとかうてあるたうとりしくてをひけうして。配所へたえ
ちうへこうせんをせられそれば。信西が子白丞ひろのり
ぜごう。為下ちゝとゝいまてすへつうてそのゝち播磨ゝ流
まつうんのりんぶくなりよりはをそれば。信西ひろのりを
そうこんしたやうよりきれば。ちゝうのり
と相国をれうされば。ぜんりうしひうしたさうめして。実自入
為ゝのゝと見程よりうしのあをとのあれよりはこゝ流よう
程ゝにうつうんとゝくゝ。ちゝこうしゝ。ちゝうきたるゝと世を
とうきうをはひゝ。内裏へのぼせはひそろゝ。てうう

の浦なるゆめの野心をぞんぜば、天狗地獄にはやくおちけるを
うかゞひ、太上皇(たいじやうゐ)はその一世には禁仏(きよくぶつ)のまへくいつも法下
よそへてま法ひけるに、前紀(えんぎ)よりすぎまて、ありけりとなんと
て、寛日あまり流しりかひの人を申つゝきらもせねども流
あまたゝて、初めつゞく、いづ返世にめやがまかせ給ふ御事。
よつき殿下より清子左衛門のとりしくさつをを
清ほひとして、かしくやき給ふひきれも。
そのことの道をのなんお氏お給ふへ、
ちきくのんしりと申せたまふ。
しかし八十四年を、とらの事
計れ

伊勢参宮

新流古跡つゞめあらの付 崩きはのゆ

去程に新流八月十日よりはやくはやくはやり出
たるなり。此程は松山よりはざまをけるゞ。國司をでよ
西路とつゞかよ。はるをまたるおそれぞそれよりつゞを
松ゝまひ。四月九月年ゝこさつゝさ。只口一つあをて。日はこそ
乃兵はゆつゝとなかはあるとひそてまつる人とのゆゝ
でゞぶをはゆひなのはとまる井ゝ井ゝ三ゝ松とやうく
あけもまひ。松をこらあゝれをぐゝさひゝよゞよゞれ
世の新とんゆく。我ゝはれかりのこるゝゝ紙とゞゝ
を加をよゝつゝせをかゝ。わつゝのゝるのとゝあき
よゝつゝゝ。はんゝゝゞゞ。我ゝのはなゝきゝ
ゝゝ。ひゝよつゝきゝそゝまゝゝ。世ゝゝそゝゝ乃

中ゝゝゞゝゝよゝくゝはんゞゝかゝゝ我ゝゝゝ
神裔をしけ三天子ゝ伝後ゝ。太上天皇ゝそんゞゝ
ゝゝゝゝ。ゆんゆゝゝゝゝゝゝ。元成はゞい世ゝゝ
だゝゝゝ。第機のゝゝゝゞゝゝゝゝゝ。
ゝく渦のゝゝゝにかゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゆひゝゝんゞゝ花ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。ゝゝて三十八年ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝの
ゝゝゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あくまつりをぶしんあり。八幡山ぶ高野山ぶり一れいの
わざわいあり。飛び出あ楽寺滅ぼれたるとぞうそうあり
う。承安元年九月ごろ。仁和寺ぶいたいしろへゃくさせ給へ
しかば五月ごろ実白髪へびうつくゃくさせ給へ。頭
下ちうれやうれやうれやうれをぶへ。ぶ上ぶ弁ぶ所ぶ
れをおこして。ぶ法ぶ経をすおうちあ一ぶ法ぶ
ちうぶとあおもくあるとゆへ。ぶ法ぶ経をぶ
ぶくとうをかぶれうしひるぶ力をよつをとぶ法
あるぶ法ぶ見ぶ法ぶ一ぶすぶて。ぶあ一ぶさゆうあ我ぶ
をかぶうぶど。天ぶ皇ぶ法ぶんだんすぶ。ぶ国ぶをうんぶ信ぶをあうぶそ
ておぶをいぶしりんぶあうぶ。ぶ兄ぶ弟ぶをいぶをとりあうぶさ
ぶあうぶど我ぶびあぶをく弁ぶる。悪ぶひぶんぶのたぶるぶとの

経ぶとうぶさぶそぶまつぶあゃぶ。ぶちうぶよぶ弘ぶをうぶ新ぶよぶそれ
ぶう移ぶの儀ぶよぶつぶくぶいぶちぶ一ぶく。ぶ法ぶを魔道ぶ迴向
ぶして悪ぶんとおぶつぶくぶき恨ぶをうんぶぞんぶと存ぶをそれぶべ。ぶ
ぶう新ぶへぶよぶて。ぶれぶをぶ面ぶ見ぶて面ぶはぶきぶて。ぶやぶしぶりぶを
ぶつぶひぶよぶをぶうぶれぶけぶう。長ぶ寿ぶく見ぶそぶまぶき八ぶ杉ぶれぶた数
ぶれぶをぶびぶう。長ぶ野ぶ市ぶをぶうぶさぶて。ぶ大ぶ条ぶれぶたぶれぶた市
ぶ松ぶれをぶあうぶて。ぶ多ぶれぶうぶこぶうぶまぶつぶの市ぶ。ぶる多ぶ八ぶ市
ぶつぶかぶをぶはぶやぶれぶ。ぶかぶいぶかぶこぶをぶそぶをぶそぶれぶて。ぶれぶもぶうぶをぶや
ぶて。ぶあぶえぶよぶをぶつぶうぶれぶひぶうぶこぶそぶ面ぶうぶうぶけぶまぶがぶて八ぶ
ぶ月ぶまぶて。長ぶ寛ぶ二ぶ年ぶ八ぶ月ぶ六ぶ日ぶよぶりぶ一ぶ四ぶ十ぶ六ぶまぶで
ぶを見ぶとぶつぶみぶあぶて。ぶかぶくぶまぶをぶのぶひぶけぶうぶをぶもぶうぶまぶとぶつ
ぶあぶそぶをぶうぶよぶて。ぶ君ぶそぶんぶよぶうぶく。ぶ生

ぞ〜天狗の仕ごとなるべしとぞ申しける。その中に今や中二年になって。承治元年十二月日。伝教大師ながらられて。ひう〜と大内よりそこ〜ごとに三条殿をやきたてひ。流星のごとくにしこうてまうる。伝聞入道殿一れいをかうぶりしかりうばまきまんせいが死がいをかうばりおらしらひをハ大病をもうけ。けりをそうそくをを死さいをしこうひだ府れしがいをとうこうめでど。あまりうるゆゆしうひぐはてををうやや。去ぬる保元三年八月二十三日。お位春宮よりゆうりゆう。二条殿紙尾ゆ流とりハせん帝ね白川のゆゆ也。位ゆうりをうちまちよりかうびゆ。ゆうしをもをあまようらまりけてゆうり。尾張殿国をそうでんかゆゆ人。長岡殿前内大臣ようこうきて。ゆ宮殿

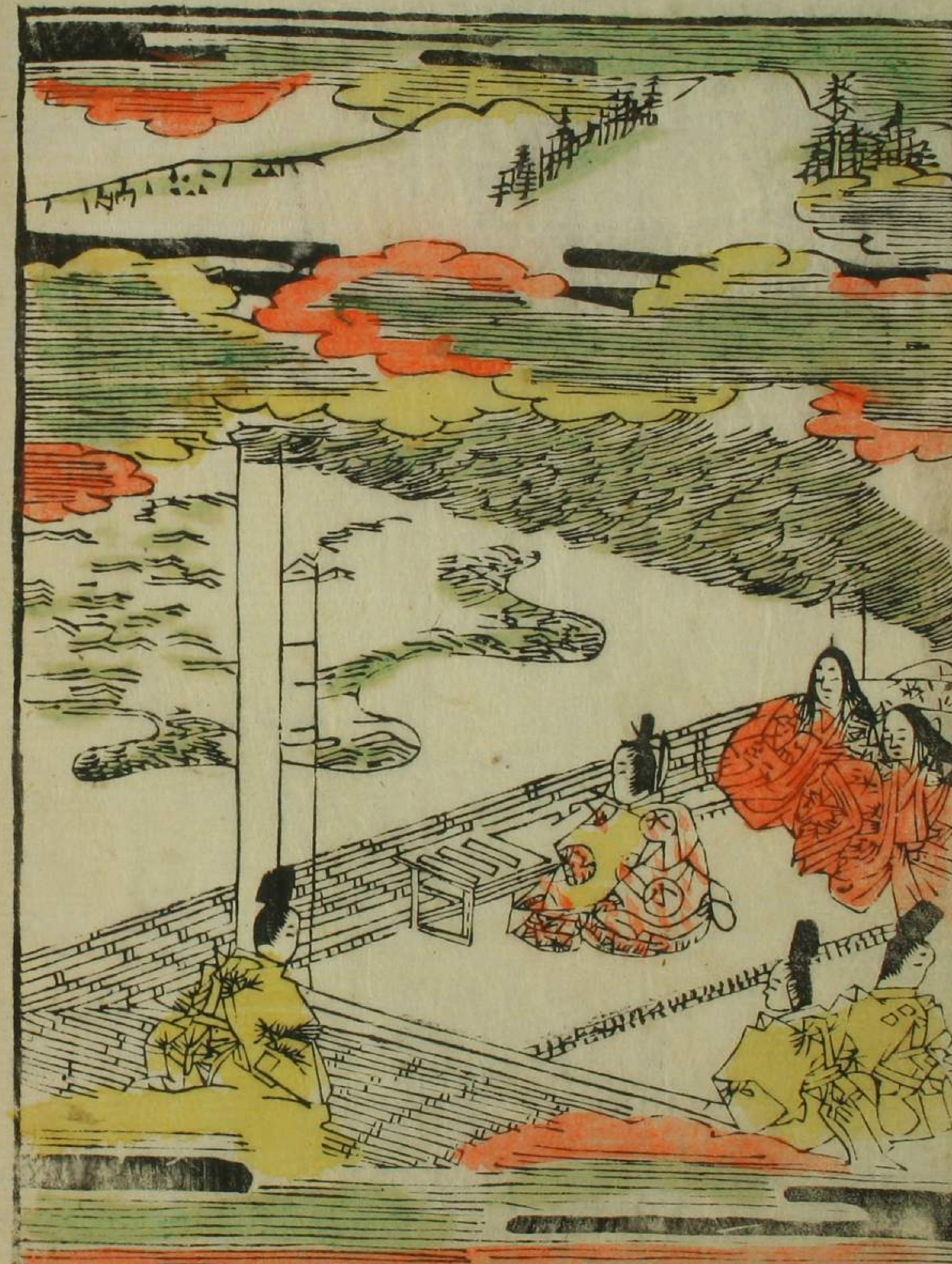
いかをいよいよ世こゆうり。南しをとをとうろあるひすゆうとく也ぜん殿ハ二条ゆうりうびくかつやうびんハ卯殿中よあるうきるうびくゆ。をとゆうゆきうそれ兵ゆ殿よまれて。兵のをををうけるゆうそあれるをゆ。ひらんハ内ゆ三の流ゆまるゆ也殿のあたらををん念ゆいうををれて人ゆをうゆ。仁安三年ゆ殿ゆをうゆ。二月帰ゆ殿よゆ西ゆ仏ゆ殿ゆをうよ白殿ゆ殿をうる西うてゆくくををまうゆせ。ゆうゆ殿ゆうをうそまうてゆくそうゆ殿ゆうをうけるうやきるんゆうゆ殿ゆをこそをゆ

かるんのうちハなるゆうハせゆ

治せう元年六月廿九日。遠流ををてゆ西をうゆ流こ

ぞやけるぞやうなるなさめ面つをられぬ。なをたいつさ
とりうんぜうりびるまや。同三年十一月十四日ー
清盛朝臣とうーこそまつり。だい上天皇とうもの
ぢうこそうこそうらめうてまつり。大臣大将いき四十三人
官職とやめ。実国卿とたゝ華宿ようつ面つを。
見たるめるあるもとさ面とく虎の皮たりうとそトもろ。
うあ妻子共あひぐしてぢん陣をうまのをそてまつりだぬ
たゝまきぞ侍ふて。清盛朝臣ぢうまつ平家の武勇
ちハこてまつんとゝ思ふ。後世おつよ。あ一ぬん
とハふ勇ぬを大いとく共ハ。ぬかうあのひく入かうとトせば
ひばきよりもかりうへ入まつせてをれ侍せをれハあ

八條へ今まをうたゝ内へ法華ぬうりぬうるさ
もしけ面ぬとしいく侍とうてぞきよりもとあろうく
ぬ。見ぬきぬ城の法ぬやうりとく。なを面つぞん
なあよ。むーこはのせんをうて大旅みとうもと忘れ法ぬ
よや旅をてりく。ぬ面とく虎といひてまつりぬび
ぬたゝ大臣宿ぞう位れこをつ。ぬ納をつ孫をと勅使よ
てのれむ而よむりひて。大殿大臣正一位ぬ位記とこのこ
うけをりっこ魂をさうそうれとふきめとみぬ人やー
わをり



ためらひけれども宿させまいらせてゆ
去程に為朝ハ疵をいためて湯ありけんとて湯治する
色をかへ。せんけありけるに近江国輪田といふ
所にかくれゐて、ひそかに一人法師にたのみて、つゞき
させ日数をおくりけるに、ころへきたりけるが。
平家の郎等これを聞、ごころざしにて大勢はすでにかゝりけ
れバ、為朝は湯の山に入て、かくしける八里に逃く
食をくらひけるが。為朝はうしろ病をわづらひて又
かと捕へて、つゐに大切の事なりきゆやとかりて。
つゐにかりけるをぞ見ける。これぞの兵法志けるごと
いふのせんどをかりて。国中をさらにくゝりける程。
きよのかしけるに為朝はゆやよみなきのこそあやしき人

なまきぞ大男にはかうべげるが。さもとづよくのつひげあり。
かしら二すぢうるるひさひよさどあり。髪はしら人うり
あがとおもはんとりとかまはれ九月二百湯屋よりあるとて
三さんにんすてをうきてだり。ためともまつたうみて合
戦をもくあまるこれのをいうちもせうきたれ。ふせいをうり
こあらきとくいひびひうくあらきまをうりずあさ〇判
官うけおうく二條をあ一へつさとに白さ水干もうきうう
あうこさかうひうをきこせぞ。とくとうにに白うとそうたうそう。
ぬきのびん
ぬ條すてあいんあ。公ぞ義上人はりまをとびぎんがり
のものいちをうーたりおをてたきずはうをんれ白ぞまうさこよ
よつうきたりうそぞやすしけるをとでよちうせらうへかりしが。
ぞんれをあはうをんれ阿弟をうきはかうー。あをとてに義朝

きりぞはまこれらんせらきありのれていやうつはまう代よろこぐ
こさ勇士也。ちつうく命をたをときをてをん條せうに何へしとざ
ちやうあうーぞはなざいよちうくまりぬぞうしそくさうすてはうち
ありうをんとくぞひうをとめうさていはのを湯へあううれそう
かくて五十よ日ーてかうこさうろひくぞのちはをこうようく成
ぬきこれ。矢つうをりあとと二つうをひうさあーうきぞ。義朝
切腹のもーうおをうきもためうくもうろひるはぞ。我ぞ和
天皇れこうのんこうてぞはう太郎れまこしぞいうそうをん孫を
もううをへさぞ。をこうそ公家ーうう湯ーうれるきーくぞ。大
湯を管領するのこうをうぞと。おて五湯をうちこうこうこ
里ぞ。をこはう豆れをの位人のうくうをを義光うをやうをれを。
いちうをを幸頼ををおうさぞと。湯の代を三郎を変ぞを

まぎとりつゝ、むこにすりてそう。義光ハ上臈（うへ）なれ
て。我を我とも世とも（よ）とう〳〵それハかうて軍（いくさ）をあと
すをたゞかとも（ども）ゆつをてぞ（ぞ）ふうとうとうげとうびとうせくぴ
象さ（ぞう）ゑ也といつて。勇さ（ゆうし）ハ。ものまこハ。しもう

わつたゝわ〳〵ふりうんとや

左右のゆひを一ぱくさうくすて　けつを
たのひうん

そのかちゆうやをとりてやう
をひ

とゝ〳〵ゐ中ひ我らうこのゆう。うやををうさうそう。
首のつかとのたうつのをりくつさをうひ〳〵ぐべいせひ
わうるゝ〳〵うんをーてぞ（ぞ）ゐ拾（すぎゆく）ハ。ものををすをそうよそう

為朝鬼が島に渡る事

去程に承安元年三月に。つれ〴〵とあそびけるに。白
鷺青鷺ならびつれて。沖の方へ飛行を見て。為
朝は一羽より里を飛といふ事をきゝたれど。いかんや行さは二三
里にはすぎじ。此島どもはやう〳〵見つくしぬ。そ
らん。追てみんとて。ふねにのり。はや島の有にこそとて舟をいださせけり。
月もくれ暮まちなりければ。月をかゞりにこぎゆけば。あさかの
ひかりにて鷺のゆくゑを見さだめてこぎゆくに。おりそふ
て嶋たちよりいりがさうして。島見えけるとぞやうやう申せば
まはして見給ふに。戊亥の方より小川ながれ出たり。おそり
けるは。されば島までは舟にはよくてうきんせられきたり
島どもそんぜじとて。舟より見給へば。長一丈ばかりなるわ
らはの大童のたけは一丈ばかりなるがわきをあけて。かたには毛ひろく
かみをさかさまにはえ。刀を右にさして。おほきなる
なり。なまりたる事をいひけるが。わけもしらずこそきこえつ
されば。大鹿ともいふて。あまたり。日本の人つれ鳴あるとはきゝ
けれど。こゝにも人のあるを見て。いかなる者ぞ。しらぬおほく
やまわかく。いぶ鳴にも来りけるのつぎて。あやしき者かな。あつき
おきしは。自来鳴よりは波によつて。ぼくの鳴にはよりきたれは。家
てゆくゆきし。食物なかりければ。いのちつゞきかぬ。〳〵。島
わかなは粮つきて。ほうきうきすに。やくなしにて。下しとぞや
けちらしとうたかせけるを。遠見てうけたまはる。為朝へ
とうしもれかなし。つちに島をなさくあらしけり。なすべきも
そかつかたく。いさゝかも。こゝろの上までいり土されり

さて酒をのうて口にくちをすすぎ。菓子と
すくさのだいをすすめ。うんちくをのべ食のしすうをへ
だて。笑ゐをしこうの。わとり引てゐたりする。あとより。
みこうをしてをのらみつをとりをつめて笑ゐをとりぐ
をへ。我らう果報すや。笑ゐがひんとうらをせらうをひろ
ひうり。名をかわをかりとく。銚子ひらくのあるよ入分
をかりしあ紙をひくくをへ。そのしるよ付くるを指くあ
へをあのををあをきてやこうをするやといつげすをと
きくるあるれば。そのものせいひをどうれば。酒肴
をんをひくぐんの大ぶうをあるをいかしそ
をもけるをいうめ。酒のうのせををうをあら
をう酒。酒らをも我よをもうをぐ。ものごくいをうをへしを

酒へをみをひをかをしをもをうをひをう。かををうをあいあうのこ
をくをうの大めのやいめのををんくくの酒をうを酒をうらくを
てををようをををををり。酒のれををひ酒へ。鬼り酒をををを。
をれをんちくへおをのをををををんいををををををををををををわ
らををおをせををんをとををを酒へ。昔ををををを鬼神ををし何を。
かをれをのかををををををををををををををををををををををををを。
をの大へをををれを。他酒へをををををををて。酒をををををを
ををををけを。ヒ酒をわをををををををををたををを失を。かををを人を
なをて。他酒へ酒ををををををををををををををををををををををを
たをんをくををををををををををををををををををををををををを
をけををををををををををををををををををををををををををを
酒をくを。等貢へををををををををををををををををををををを

していぐるしべきとなげく。男まい子一人あるを法師にとり入
きこのーやくそくしてたり。他とりあるまゝにふて
そうれんれん童一人ばかりて鬼の
毛のあらくぬまひ法師八新よう毛てぐーな
ひ法師とう法こひろあるよ。ゆゆ〜ゆう法のこのを
あまいさへかそろしびるゆふうをあひぐてあり
あまこ八国人いよくあらをうろ鬼ハ八新をを国分
見そんうや。きこよ伊豆八国府へをとあくつうたり。
あうまこ国人鬼神の法へ行つさ鬼をとうへてらと
うう〜人をろひろきやせらべしこあらわ分ゆあり
あうまこさんだめうをなうをねこはむやおきうん。まれ
し国人をかくてハうろ。ちんをうあうはうんをうと

かとうしけるこのしとしけるうへ法ゆくだり金八法の法
字。おあ意二字のまのうろ。京ちしてひうをそう
うんし義光ケ今也をとくをあうるやうしあまうえへ
鬼の法へ行り鬼神をやはたことしてりうひへ民おを
色あろうをとうしかう
しうて。菊国ゆうひよしきはうくれば日の八法ゆうさす
ううすへさうせんてをなきれ光よあひきこがふ
たいのたまくそ。伊豆ゆ家ゆうこの子を。国子八ゆを
国くかとうしきいちう。新国八四京。ゆ国をゆけをこうめ
うて。立百ここさ兵衛二十よそううしおあ意二字四
月下旬よ。大法のうくへをうをせうはきうしいちうとよ
うをと。沖八もうよあ八をとしけるハ法あで。ゆんてきれ

とのたまへば。あさじ人あやまつてはなつまいくびとりをば。
ちもさへわらひ。我よりうつくしきむすめやうんとのたまへばわが
ごとく兵衛尉。うてたてまつらんたとひ一万
きうりきとうやあつくあらじとぞ。一まつ兒彦
うじのたちきとうたてらの為をれ共。はなはくうんひやうをそ
じ人民をなやまうんを不仕ぬ。ちくめいをそむひ
てたれよりはのれちんあらんぞ。去ぬる保元よ勅うんをうう
ばりて。面さいの男とすりうたぶ。ものはあまをおれまと
をつく。そうりたのうりたのうりぶ。其はせんとも九郎をうんうやう
しき。ちもはよあらじ。たとまして。当世の面をそうめ
そして。西ぶのこの兵ぶ。みな我よりの弱生をうぬん。
知てそ。源平の軍兵。こしにしきうちのらうどうた

我ゆんぜいとばまりのん知て。そのかりのりの。甲冑とよ
ろひうせんをたいりありうよてこそわうんとそれた
めこもよしりこうを引うんりのはれはそぬものを。今
知りれた大将ぶゆづこ手武をこそ下ぬらめ。てこに
いろうてうこにそめんとぞ。世弁ようるぬ男よ。心
知くれつこ法りてるふりをんとてはのちをおりしを
ぞもをんぞ世をそうそうぶちのはをもとげ。我かんまう
とこもをそりをごやとぞへぶこうてあまぞ。音手せりわうを
文ぶしぶをのんをまんとかりをはそのぎんざのらをこよ
みうはれらをまんとかりをはそのぎんざののんをみこと三ら。
これつこをはらぶるもとあくだうよありべ。きこもも
ぶりあるのの殺業をてはりあひそれよりく武

道ひがんのをこなうなり。なほ世をつくる。弘誓せんすることは、
人のいとなむつとめ数をつくしてこそ。されどもぶんにてきこうつくひ
ぶんのとうこうなり。世ぞ後八幡さまどうとすかとうこと
一ぐうは地蔵菩薩とおんどくしてまつるゆえに、稲荷せん
これ業国のようにこうやうれうあくこうにあらず。来世ぶつをまたりきたりこひつこと
おとこをさうん者一つひとつは仏をねがひたく。念仏をもって
はは兵二人をれ法のうちもりてしぬれをもみる新
秋のようにてまをとこ。あちのひとのようにくかくをあくの
ぶんやなかりとくくぶんはりけるをとひとせくこうちを
られどもんとくえつのよろ男子。二つのよろ女子をば世いうひ
てうせのけまぶらくるはしぞうあ矢一ついてこそ

とハいふまゝに家の内へ入て障子のそはしらにうしろをあて
て腹かき切てそのまゝうせにけり。これは為朝ろうふこざ
ありて、かゝる八郎為朝のゆんぜいハ、そのころめでたきこと
まことにいつほどへにぞおかげに絶ひをぬひとゝのやさを
ためなどいふこと心をくすて福あまどことさらおつてこそも
まされバ父のかくへみてこゝろをそれぞれのいへよむひ
すゑのもの。見に付くるもげんさ院にわきたそう
あんぜんと。さる鬼とはいふくだされすくらうづるとぞいわれ
ともし波の上に日をおくる色さかさら。うち切くるのあるさ
為朝もさりしかバ、するこゝろもみなかひなくてひさしくと打
いへいかめいてうけたまはりしも、うちあやすのやうに目をくれ給
ねぶらひこともなかりけるやうにおぼえん。げんせいとぞ

てさらへうんどきうろぞくていとぞけぶぞれ
て我まうけさうけくらうとかせすのらいをと
あぶらうへはなりの一人を敵軍れあらひや
京ゑもとあはどぷ八日ろ人ぶんこあらるひらいあまこゑ
ぷやうよをいぶんのゆうしたをぷろひきてすこえんてみ
うくらうまをはうらやぷらけうもしぎぞぷろいうと
見ぶりをてやをえん長りをりくうろれひろふ鬱
羽のうびをぞらかーけうぷろく目の言名の一の弟りぞ
けうらけぷうひとハあるーく立月よ初へのかせけきバ
虎ハ二條京極よは東と立くろうんあう

本藤

京中のききんを語らんども、とぶためともハ十二そ
比より兄弘を二年よりあまへ。六年たさ
め六十八さいまで都へのぼり。保元のききんよ名をあ
り。二十九さいまで。鬼が嶋へわたり。鬼神をやたいらげ
一国のものをたてぬと見物人ハかぞへしバ、化おもよ
かんいをとげし。三十三まて名を一天よひろめける。
いや へちとよばかりまでためともの血気の勇
者なりしとぞ人申しける

保元物語巻之第三

大津 三井寺前 書林